ノナラ・ナラに関する一考察

名嶋義直

キーワード　*ノダ、ノナラ、ある命題、既定命題、「関連づけ」という前提*

0. はじめに

条件節と帰結節とを接続する形式の一つにナラがあるが、ナラにはノナラに置き換えられるものと置き換えられないものとがある。また、タラで言い換えることができるナラと言い換えることができないナラとがある。[注1]

(1)　出発するなら、早い方がいい。　（下線引用者、以下同様）
（『深夜特急５』沢木耕太郎　新潮文庫）

(2)　出発するのなら、早いほうがいい。

(3)　*出発したら、早いほうがいい。

(4)　もし、私が日本に行ったなら、これまで経験してきた体験というのが、まったく違う意味をもってしまうだろう。
（『アジアロード』小林紀晴　講談社）

(5)　?もし、私が日本に行ったのなら、これまで経験してきた体験というのが、まったく違う意味をもってしまうだろう。

(6)　もし、私が日本に行ったら、これまで経験してきた体験というのが、まったく違う意味をもってしまうだろう。

これらの事実は、タラには置き換えることができないナラが、後件に先行する事態[注2]の現実世界における生起を前件で条件としているのではないことを意味する。では、それらのナラ・ノナラは帰結に対する条件として何を提示しているのであろうか。

---

1) 厳密にいうと、ナラとノナラとの間には微妙な語感のずれが存在する。その理由については4章と5章とで考察する。なお、本稿で言う「置き換えられる」ということは「文法的に適格である」ということであって両者が意味的に全くの等価であるということではない。

2) 本稿では益岡（1993：3）にならい、タラを「前件で時空間の中に実現する個別的な事態を表し、後件でその実現に依存して成立する別の個別的事態を導入する」形式であると考える。

本稿では用言に接続するノナラとノナラに置き換えることができるナラを主たる考察対象とし、[注3]両者が異なる機能を持つ別形式であると見なして考察する。そして、ノナラは「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を条件として提示する形式であり、ナラは「ある命題を可能世界において真であるとする」という話し手の「判断」を条件として提示する形式であることを述べ、厳密には両者を区別するべきであることを主張する。

1. 考察の対象

本稿ではノナラとノナラに置き換えることができるナラを主たる考察対象とする。先行研究で指摘されているノナラに置き換えられないタナラについては、ナラとノナラとの本質的な違いをより明確化するため、直接的な考察の対象とはしないが、先行研究とは異なる本稿の立場を表明しておく。

(7) a 明日ボーナスが出たなら、買い物に行こう。
b*明日ボーナスが出たのなら、買い物に行こう。
c 明日ボーナスが出たら、買い物に行こう。 (鈴木1993b：132)

鈴木（1993b）ではノが挿入できないナラはタナラで一語相当であると考え、このタナラをタラの一種とし、前件にテンスの分化を持つナラとは別形式と考える立場を取っている。これに対し、本稿ではタナラをタラの一種と考えることは適切ではないと考える。相対テンスである（7）aはあくまで想定された可能世界における完了を表しており、現実世界の時間軸には矛盾しない。しかし、(7) bではノナラ節を形成する「明日ボーナスが出たのだ」という文が現実世界の時間軸に矛盾しているため非文となるのであり、矛盾を取り除けば、ノナ

---

[3] 名詞述語文Nノダが条件節化すると、形態上はNノナラとなるが、実際の使用例を見ると、Nノナラは使用されず、Nナラとなることが非常に多い。例えば、次の例では「部長なノダ」（実際の用例ではンナラ）と述べた後、条件節化しており、本来ならば、「部長なノナラ」となるべきところであるが、実際は「部長ナラ」となっている。

俺は部長なんだ。－中略－しかし、部長なら、女の一人ぐらいいてもおかしくないぞ、そうだとも。 (『女社長に乾杯』)

その理由として考えられるのは、前件が用言ではなく体言である点である。体言で構成される既定命題を条件節化する場合は、構文上、ノが必須ではなく、ダの仮定形ナラでこと足りるためであると考えられる。名詞述語文におけるナラの振舞いについては別稿、名嶋義直（1999）「体言に接続するナラの類型について」『ことばの科学』12名古屋大学言語文化部言語文化研究会pp.255-274を参照願いたい。

ラの使用が許容されるからである。

(8) a ボーナスが出たなら、今度の日曜日は買い物に行こう。
b ボーナスが出たのなら、今度の日曜日は買い物に行こう。
c ボーナスが出たら、今度の日曜日は買い物に行こう。

つまり、(7) aのナラがノナラに置き換えられないのはタナラがタラの一種であるからなのではなく、ナラやノナラがどのような性格の命題を条件として提示するかという点が問題であるからなのである。この点については3章以下で述べる。(7) aと (7) cとが意味的にほぼ等価とされるのは、ナラがテンスの分化を持つからこそである。タナラはタラの一種なのではなく「タ＋ナラ」なのである。なお、当然ながら、(8) aと (8) bとは意味的に等価ではない。この事実はナラとノナラが同一形式ではないことを示唆する。

本稿ではノナラバ・ノデアレバについてはノナラに準じるものとして扱い特に取り立てて考察の対象とはしない。また、ナラを「ノナラのノが脱落した形式である」とは考えない。したがって、「ノナラ」と「ナラ」とを区別して記述する。

2. ナラに関する先行研究とその問題点

2.1. 先行研究概観

ナラについて言及した先行研究は多く、いくつかの重要な指摘がなされている。ナラ条件文の全体的な性格については山口堯二（1969：154）がある。山口はナラを「断定の助動詞『だ』との関係から考えるのが近道」と考え、「『だ』は最も純粋に判断を表す形式であるから、『なら』は、他の形式に比べて、より直接に判断そのものを仮定する形式といえる」と述べている。

その仮定されている判断の主体について言及したのが久野暲（1973：103-108）である。久野はナラ条件文の特徴として「話し手は、S1を聞き手（あるいは人一般）の断定として、完全に同意しないまま（すなわち自分自身は、その正否に対する判断を下さずに）提出する」ことをあげている。

この「聞き手との関係」についてHinds, John . & Tawa, Wako.（1975-6）はナラ条件文の前件には先行談話から引き出すことができる情報が現れなければならないと主張している。つまり必ずしも「聞き手（あるいは人一般）の断定（久野1973：108）とは限らないということになる。Inoue, Kazuko（1979）は条件文全般を対象にした素性分析を行い、前件が話し手の断定という素性を持つナラと持たないナラの二種類があることを指摘している。

蓮沼昭子（1985：72）はナラ条件文には前件に他者の意向・主張が関与する場合としない場合があることを指摘し、「ナラの機能は命題の外にある他者の意向・主張と話し手の発話意図の関係づけにある」と結論づけている。

一方、鈴木義和（1993a：11）は聞き手の断定を表す用法はナラ条件文成立の必要条件ではなく十分条件であり、聞き手側にある情報をナラで受けることが多いため、聞き手の断定を表す用法が多くなるのであり、聞き手との関係を持つか否かということはナラ条件文にとって本質的な問題ではないと述べている。

ナラ条件文の時間的性質に注目し「特定性」という概念で分析したものに有田節子（1991）がある。有田はト・バ・タラとの比較を通じ、ナラ条件文の前件と後件は「必ずしも同一の時空間に含まれている必要はない」（有田1991：107-108）ことを示し、それらは「話者の判断」によって結び付けられていると結論づけている。

2.2. 先行研究の問題点

先行研究で指摘されたナラの諸特徴はナラについての問題点を改めて提起する。なぜナラがそのような特徴を有するのかという根本的な疑問である。

具体例を挙げると、ナラが前件を「聞き手（あるいは人一般）の断定として完全に同意しないまま」（久野1973：108）提示することができるのはなぜか、「命題の外にある他者の意向・主張と話し手の発話意図の関係づけ（蓮沼1985：72）を行うことができるのはなぜか、なぜナラは異なった時間軸に沿う前件と後件を「話者の判断」（有田1991：108）で結びつけることができるのか、といったナラの本質が問題となる。

本稿では、ナラとノナラが相互に置き換え可能な場合と不可能な場合とが存在する点に注目し、ノダの機能との関連を手がかりにして考察を進める。

3. 仮説の提出－ノナラの機能－

本章ではノナラの機能について仮説を提出する。

ナラがダの仮定形であることは一般的に認められている。とすると、ノナラはノダの仮定形であると考えることができる。現代日本語において、ダは用言に接続できない。この事実から、ノナラをノとナラの二形態素に分け、ノが用言節を体言化する機能を担い、それにナラが接続すると考えることもできる。しかし一方で、ノを介せず用言に直接ナラが接続する事実も存在する。したが

って、ノとナラとを区別して考えるより、ナラとノナラは異なる形式であり、ノナラで一語と考えた方が適当である。以上を前提1とする。

名嶋（未発表）では三上（1953）、国広（1985, 1992）、田野村（1990）を発展させる形でノダの中核的機能を次のように定義した。

(9)　ノダの中核的機能

ノダは「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題が現実世界においても真である」という話し手の判断と、「当該既定命題が知的意味レベルにおいて『関連性』を有する」という話し手の判断とを聞き手（客体化された話し手を含む）に対して明示的に主張する。

ここで言う「既定」[注4]とは話し手の意識下において「命題の真偽が既に確定している」という意味である。したがって、発話時以後に生じる事態であっても既定命題としての表現が可能である。また、「既定」ということは発話時における現実世界において命題が真であることを必ずしも意味しない。真偽未確定や偽であってもよい。

大まかに言うと、ノダは既定命題に対する話し手の判断レベルと、聞き手に対する発話態度レベルとに関与すると考えられる。既定命題に対する判断とは「ある命題を発話時の状況・文脈[注5]等と関連づけ、その命題を既定命題として捉える」という判断であり、聞き手に対する発話態度とは「関連づけられた既定命題が発話時の状況において『関連性』を有する」という判断を聞き手に対して明示的に主張するという発話態度である。以上の点から見てノダはモダリティ形式であると言える。この定義を前提2とする。

一方、文の階層構造を考えると、ノナラは従属句である条件節の一部であるため、発話態度を表すモダリティ形式としては機能し得ない[注6]と考えられる。これを前提3とする。以上の3前提から本稿での仮説が帰結される。

(10)　ノナラの中核的機能－仮説－

---

4) 本稿の「既定命題」、および「既定」に関する考え方は主に国広（1983, 1992）の論考を基本的に受け入れ、執筆者なりに解釈したものである。

5) 本稿の「文脈」に対する考えはBlakemore, D.（1992）に影響を受けている。具体的に言うと、文脈とは話し手・聞き手の置かれた状況、話し手が推論の結果得た命題、先行発話、まだ発話されていない後行発話等、人が発話の意味理解に活用可能なあらゆる情報を指す。

6) 尾上（1999b：79-80）においてもノナラは「伝達のために句中のある成分に特別な役割を背負わせるという加工」が行われる以前のレベルに分類され、ナイ・テイル・ヨウダ・ソウダ・タ・ラシイを句中に含むことはできるが、ウ・ヨウ・マイ・ダロウ等は含まないとされている。つまり、ノナラは聞き手に対する発話態度を伝達する機能を担わないと言える。

ノナラは「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を帰結節の発話に対する条件として提示する。

ここで注意を要する点は、条件提示に先立ち「関連づけ」は既に行われており、「関連づけ」は前提されるという点である。厳密に言うと、この「前提」という特徴はノナラだけが持つ固有の「機能」ではない。しかし、ナラは「関連づけ」を前提しないと考えられるため、ナラとの対比において重要な意味をなす特徴となる。よって、中核的用法に加えて考察することにする。

4. 仮説の検証

4.1. 条件の提示

本節では仮説にあげた「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を条件として提示する機能について考察する。まず、本稿の仮説が諸先行研究の論旨とは異なることを述べ、その上で仮説の妥当性を検証する。

久野（1973：108）で「聞き手（または人一般）の断定」、蓮沼（1985：68）では「他者の意向・主張」の「関与」という表現で論じられたように、先行研究においては「ナラ節は聞き手（他者）の断定・主張を表す」という点がナラの本質的な特徴として議論されてきたように思われる。しかし、この考え方に立つと、次の（11）のようにナラ節が「話し手の断定・主張」を表している事象に対しては統一的な説明が困難になる。

一方、本稿の仮説を用いれば、前件の命題内容が話し手・聞き手・第三者のいずれであっても統一的な説明が可能である。本稿の仮説で言うと、ノナラが接続するのは「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題」であり、その既定命題は現実世界の状況認知を契機として、命題集合の中から話し手の主観的判断によって関連づけられ、既定命題として捉えられたもの[7]である。既定命題として捉えるということは表現を替えると、「ある命題を『既定』のものであると話し手が判断する」ということである。つまり既定命題は「話し手の判

---

[7] Hinds, John. & Tawa, Wako.（1975-76）は、ナラ条件文の前件には先行談話から引き出すことができる情報が現れなければならないと主張している。これに対し、本稿では「先行談話」に限らず、話し手・聞き手の置かれた状況、話し手が推論の結果得た命題、まだ発話されていない後行発話等の幅広い文脈情報と適切な「関連づけ」が可能な命題が前件に提示されると考える。

断」を表すことになり、先行研究とは正反対の結論となる。

(11)　（とにかくギリシャまで行こうと決めた後で）明日ギリシャに向かうのなら、今夜しか会うチャンスはない。　（『深夜特急５』）

(12)　明日ギリシャに向かうのだ。今夜しか会うチャンスはない。

(11) では「話し手自身が『ギリシャまで行こう』と決めた」という状況と「(話し手自身が) 明日ギリシャに向かう」という既定命題とが関連づけられていると考えられる。ここで話し手が「既定命題の現実世界における真」と「関連性の存在」を明示的に主張しようとすれば (12) が発話されると考えられる。しかし、その主張を行わず、「既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を条件として提示し、何らかの帰結を述べる場合もありうる。その場合、(11) が発話されることになると考えられる。

(13)　（ぐずぐずしている子供に）行きたくないのなら、行かなくともいい。　（『錦繡』宮本輝　新潮文庫）

(14)　行きたくないのだな。じゃ、行かなくともいい。

(15)　向こうが社長をと言っているのなら、仕方ないでしょう。
（『女社長に乾杯』赤川次郎　新潮文庫）

(16)　向こうが社長をと言っているのだ。仕方ないでしょう。

既定命題の内容は話し手によって言及されたものばかりであるとは限らない。しかし、その命題内容を既定命題として捉えるのは、やはり話し手である。(13) では聞き手の言動と「(聞き手が) 行きたくない」という既定命題を関連づけたと考えられる。(15) においても同様である。ここで注意したいのは聞き手が「行きたくない」や「向こうが社長をと言っている」という既定命題を直接発話していないという点である。たとえば、(15) において「社長を（出せ)」と言っているのは話し手によって「向こう」と捉えられている第三者である。つまり、部下の報告を受け、話し手が状況を認知し、自己の推論過程を経て既定命題を形成していると考えられるのである。

既定命題があくまで話し手の推論によって形成されるものであるとすると、現実世界において偽となる可能性、不確実性を有することになる。そのため、「既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を条件として提示することと、その命題が「既定」であることとは矛盾しない。

聞き手の発話を言語形式上そのまま受ける場合でも同様のことが言える。

(17)　「そのグルン族のコータムに会いたい。どこに住んでいるんだ」
－中略－
「会いたいんなら、たぶん、まだこのカトマンドゥにいると思いますよ」[注8]　（『神々の山嶺』夢枕獏　集英社）

(18) 「会いたいんですね。たぶん、まだこのカトマンドゥにいると思いますよ」

(19) (分かっていますと言った相手に)
わかっているのなら、そんな無茶はやめろ。
(『孤高の人』新田次郎 新潮文庫)

(20) わかっているのだな。じゃ、そんな無茶はやめろ。

(17) においても、話し手は聞き手が「コータムに会いたい」と発話したという状況と関連づけ、「コータムに会いたい」という既定命題を形成したと考えるべきである。先行する発話を受けて既定命題が形成される場合、聞き手の発話と話し手が形成した既定命題の語形・音形とが一致、または、類似することがあり、一見、聞き手の主張を受けているかのように見える。

しかし、聞き手の発話を肯定的に受けて導き出された既定命題であっても不確定性を有することに変わりはない。既定命題が現実世界においても真であるとは限らないからである。(19) を例にとれば、聞き手が「わかっている」と言ったからといって、本当に「わかっている」かどうかは分からないのである。そのため、ノナラを用いて条件として提示できるのである。

以上のように、ノナラ節における既定命題は話し手の推論過程と主観的関連づけを経て提示されるものである。また、「既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定も話し手の判断である。したがって、ナラの前件が「聞き手(他者)の断定を表す」という先行研究の論旨はノナラの本質的特徴であると言うことはできない。「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を条件として提示することがノナラのより本質的な特徴であると考えられるのである。

4.2. 「関連づけ」という前提

本節ではノナラが持つ「関連づけ」という前提について考察する。

ナラとノナラとを相互に置き換えてみると、ナラは問題なく許容されるがノナラは許容度がかなり低下する場合があることが分かる。次の (21) はある宿泊施設の宣伝文句である。テレビやラジオのコマーシャルという発話状況で考えると、(22) の許容度は低い。

---

[8] この例文はいわゆる「疑似条件文」であり、厳密に言うと、前件は後件に対する条件ではない。前件は「発語内行為」の条件となっており、「会いたいんなら(教えてあげるが、実は)Q」という構造であると考えるべきである。詳しくは毛利 (1980)、坂原 (1985) を参照願いたい。

(21) 伊東に行くなら、ハトヤ。電話はヨ・イ・フ・ロ。

(22) ?伊東に行くのなら、ハトヤ。電話はヨ・イ・フ・ロ。

(22) の許容度が低下するの原因は次のように分析することができる。聞き手は (22) からあたかも「自分が伊東に行くことが既に決まっていると話し手によって判断されているかのようなニュアンス」を受ける。言い換えれば、聞き手自身の状況と「伊東に行く」という既定命題とが関連づけられていると感じる。しかし、ほとんどの聞き手には「伊東に行く計画」はないであろうし、たとえあったとしても、マス・コミュニケーション手段を媒体とした発話状況において、そのような判断を受けることは実際のところ非現実的である。つまり、「関連づけ」られていると感じるにも関わらず「関連づけ」が行える状況ではないため、矛盾を生じ、許容度が低下するのである。

一方、同じ語形の発話が (23) の状況では完全に許容される。

(23) 幹事：今度の社員旅行は伊東です。
社員：伊東に行くのなら、ハトヤ。電話はヨ・イ・フ・ロ。

(23) の社員の発話が状況との「関連づけ」を感じさせる点は (22) と同様である。異なるのは、その「関連づけ」が可能な状況であると判断される点である。したがって、「関連づけ」は何ら矛盾なく受け入れられる。

以上からノナラ節では「関連づけ」は自己矛盾なしに否定することが不可能であることが分かる。したがって、「関連づけ」を前提すると言える。

また、ノナラは「関連づけ」を前提とし、その前提は既定命題における「関連性の存在」を聞き手に含意させるが、既定命題と現実世界の状況との間に「関連づけ」が前提されない場合、その前提は保留、または却下されると考えられる。(22) がその例である。(23) の場合は関連があると考えるであろうが、(22) を聞いても誰も自分の状況と関連があるとは考えないであろう。

なぜ既定命題における「関連性の存在」が聞き手に含意されるのかと言うと、それはノナラが「関連性の存在」を明示的に主張するノダの仮定形であること、および「関連づけ」を前提とし、「『ある状況と主観的に関連づけられた既定命題を現実世界においても真であるとする』という話し手の想定を帰結節の発話に対する条件として提示する」というノナラの中核的機能を母語話者である聞き手が－たとえ無意識にせよ－認識しているからであると考えられる。

これに対し、ナラは現実世界におけるある状況との「関連づけ」を前提としないと考えられる。(24)・(25) が条件として提示しているのは「ある命題を可能世界において真であるとする」という話し手の想定であると言える。

(24) 私も、あの人がどうしてもそうするというなら、ついて行きますが－後略－

（『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』村上春樹　新潮文庫）

(25)　あなたがもし、全く自由な気持ちで賛成してくれるならば、あなたと結婚したいな。　（『青春の蹉跌』石川達三　新潮文庫）

そう考えると、(22) とは異なり (21) が許容される理由が説明できる。話し手・聞き手の置かれた状況と全く関連のない事態であっても、現実世界と切り離された一つの可能世界において想定しうる事態として「ある命題を真であるとする」ことは問題なく許容されるからである。[注9]

5. ナラとノナラの相互関係

5.1. 類似点と相違点

前章の考察からノナラだけが「関連づけ」を前提するということが明らかになった。しかし、ナラとノナラは (22) のように置き換えが許容されにくい場合が存在する一方、かなりの範囲で置き換えが可能であるようにも思われる。本章ではこの点について考察する。

3章で仮説として提出したように、本稿ではノナラは「関連づけ」を前提し、「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を帰結に対する条件として提示すると考える。一方、ナラは「ある命題を可能世界において真であるとする」という話し手の想定を条件として提示すると考える。既定命題が「命題」の下位分類に属するものであることから考えると、ノナラはナラよりも特定された命題を条件として提示するものであると見なすことができる。両者の特徴をまとめると、(26) のようになる。

(26)　ナラとノナラとの対比

	関連づけ	命題	命題の真を想定する時空間
ナラ：	＜前提しない＞	＜ある命題＞	＜可能世界において＞
ノナラ：	＜前提する＞	＜既定命題＞	＜現実世界においても＞

---

[9] 尾上（1999a：100-101）では「現実には存在しない事態をあえて仮構するという語り方が採用される」場合、「（いつかどこかで）話者が存在しているこの世に成立、存在する事態として想定する場合」と「あくまで話者の立っているこの世と接触させず、観念上の内容たる位置にとどまるものとして思い描くという場合」とがあると述べられている。この区別はノナラとナラの機能にも当てはまると思われる。ノナラにおける条件提示は前者、ナラにおける仮定は後者であると言える。同様のことが5.3節で扱うノナラとナラの積極的な交錯を表す事象にも当てはまる。

このナラとノナラの機能における類似点と相違点は両形式の置き換えを行う際に影響する。特にナラをノナラに置き換える場合には命題の性格が限定されることになる。そして、そのような命題（＝既定命題）を条件節化する場合、「関連づけ」を前提とする必要が生じる。

5.2. ナラとノナラの相互互換性

5.2.1. ノナラをナラに置き換える場合

本節ではナラとノナラの相互互換性について考察する。

まず、ノナラをナラに置き換える場合であるが、この場合は問題がないと思われる。ノナラで条件としていた「既定命題」を話し手の主観的関連づけを前提しない「ある命題」であると見なせば良いからである。既定命題は、「ある命題」が性格上限定されたものであるが、その限定を行わないことは決して困難なことではない。この命題に対する認識の転換は条件節を形成する命題の性格を「文脈命題」から「話者思考命題」[注10]へと転換するということである。条件節の命題が「既定命題」でなくなれば、「関連づけ」を前提する必要もなくなり、ナラの機能だけで条件節の形成が可能となる。

(27) 一生水商売の世界で生きて行くのなら、それもよかろう。(『錦繍』)

(28) 一生水商売の世界で生きて行くなら、それもよかろう。

(27) を例にとると、人は「(聞き手が) 一生水商売の世界で生きて行く」という命題が話し手によって「聞き手の言動」という状況と関連づけられた結果表出されたものであると理解する。それに対し、ナラが使用される (28) では「(聞き手が) 一生水商売の世界で生きて行く」という命題が「聞き手の言動」という状況と関連づけられた結果生じたものであるとは必ずしも考えない。(29) と (30) についても同様のことが言える。(29) では、関連づけの対象となる何らかの言動が聞き手側にあり、それに対して「(聞き手が) 行けない」という既定命題を話し手が関連づけたと考えるのが一般的な解釈である。ノナラは「関連づけ」を前提するからである。しかし、(30) ではそのような状況はなく、単なる「話し手の想定」と見なす方が一般的であろう。

---

[10] 本稿では、主に「話者の仮想思考」という内的要因を推論に用いることによって形成された命題を「話者思考命題」とし、文脈等の外的要因に対する認知を契機とし、それらを積極的に推論に用いて形成された命題を「文脈命題」とする。そして、ナラ節を構成するのは「話者思考命題」であり、ノナラ節を構成するのは「文脈命題」であると考える。

(29) あなたが行けないのなら、私に任せて下さい。

(『花埋み』渡辺淳一　新潮文庫)

(30) あなたが行けないなら、私に任せて下さい。

以上をまとめると次のようになる。ノナラで表す条件節はナラでも表すことが可能である。既定命題は「命題」の下位分類に属する。したがって、その機能から見て、ノナラはナラの下位分類に属することになる。そのため、ノナラ節を形成する既定命題を「ある命題」と見なし、「可能世界において真であるとする」ことが可能であるからである。ただし、ノナラをナラに置き換えても適格な文として成立するが、聞き手の理解には変化が生じる。

5.2.2. ナラをノナラに置き換える場合

前節とは対照的に、ナラをノナラに置き換える場合は文の許容性が低下することがある。ナラをノナラに置き換えるということは条件節を形成する命題を「話者思考命題」から「文脈命題」へと限定することを意味する。そのため何らかの事由により、既定命題との関連づけを前提しうる適切な文脈が想定困難な場合、文脈と既定命題との「関連づけ」が前提されず、ノナラが不適格とされる結果となる。先に挙げた(22)はその例である。

しかし、実際には許容性を低下させることなく、ノナラに置き換えることができると判断される例が数多く存在する。

(31) 試合で力を出せないなら、負けても仕方ないさ。　(『一瞬の夏』)

(32) 試合で力を出せないのなら、負けても仕方ないさ。

(33) ひとりで山に入るのが淋しいなら、誰かとパーティーを組んで来ればいいではないか。　(『孤高の人』)

(34) ひとりで山に入るのが淋しいのなら、誰かとパーティーを組んで来ればいいではないか。

(35) もし人殺しをしているなら、伸子だってためらわずに殺したはずである。　(『女社長に乾杯』)

(36) もし人殺しをしているのなら、伸子だってためらわずに殺したはずである。

その理由として考えられるのが、「聞き手による文脈の想定」[注11]である。聞き手は話し手の発話を受け、ある特定の文脈の中で当該発話を理解しようとする傾向がある。ノナラが用いられている場合、「関連づけ」が前提されうる文脈を想定するものと思われる。

---

[11] Schmerling (1978)、および、深田(1992：150-151)の指摘による。

文脈とは非常に幅広いものであり、単なる先行発話だけではなく、話し手の世界に関する知識、推論の結果得られた命題等を含む。したがって、「関連づけ」を前提できる文脈を聞き手が想定することはそれほど困難なことではない。(31) で言えば、「(その選手が) 試合で力を出せない」という命題と関連があると考えられる文脈－選手の能力に関する先行発話やその選手についての知識等－を想定するということである。

一方、適切な文脈の補充が想定困難で「関連づけ」が前提されない場合もある。先に挙げた (22) や次の (37) などがその例である。(37) を「看板の表示」という文脈を変えずにノナラに置き換えると (38) のように不適格となるが、異なる文脈を設定すれば、(39) のように容易に許容される。

(37) SKI AT YOUR OWN RISK－中略－
この看板は、次のようなことを語っていると思われる。
「スキーをしたいなら勝手にどうぞ。だけど、ケガしようが死のうがあんたの責任だよ。訴えても勝てないからね」
(『アジア・旅の五十音』前川健一　講談社文庫)

(38) ?(看板の表示) スキーをしたいのなら勝手にどうぞ。

(39) (急斜面を見ている友人に) スキーをしたいのなら勝手にどうぞ。

以上をまとめると、次のようになる。ナラで表される条件節をノナラで表すことは構文上可能であるが、その場合「既定命題との『関連づけ』が前提として存在しうる文脈が想定可能でなければならない」という語用論的制約が生じる。そのような制約を満たす適切な文脈が困難な場合は許容性が低下することになる。また、当然ながら、ナラをノナラに置き替えた場合、聞き手の理解には変化が生じる。

5.3. ナラとノナラの交錯

5.3.1. 交錯の実態

本節ではナラとノナラの交錯について考察する。ナラとノナラは性格上の共通点を持ち、相互に互換しうる場合があるが、ナラからノナラへ置き換える際は条件節における命題の性格が限定されるため制約が生じることが前節までの考察から明らかになった。つまり、ナラとノナラは本来異なった機能を持つ別個の形式であると考えられる。それと関連して、条件として提示する命題の性格上、ナラの方がその使用が許容される範囲が広いということも明らかになった。

ところが、実際の使用場面を観察すると、ナラとノナラとはかなり交錯して使用されているように思われる。その原因として、前節で述べたように、まず、

ノナラで表す既定命題をナラで「ある命題」として表現することが可能である点が挙げられる。また、「聞き手による文脈の想定」もその原因として考えられる。

先述のように、聞き手が「関連づけ」という行為を、前提として想定し得る適切な文脈を想定できれば、ナラをノナラに置き替えて理解することが可能であり、その「適切な文脈の想定」は通常の場合比較的容易であると考えられる。それゆえ聞き手がノナラ節をナラ節として解釈しても、ナラ節をノナラ節として解釈しても伝達に支障が生じない場合があるものと思われる。その一方で、実際の使用例の中には、ナラ節の命題が明らかに現実世界における既定の事態として存在しており、ノナラで表現することが適切であると考えられるにも関わらず、ナラが使用されている例が存在する。(40) では「(聞き手が) そこまで言った」、(42) では「(警察が) こんなことをしている」、(44) では「あの柳が挑戦できた」という発話時以前に確定している現実世界の状況があり、話し手はそれらの状況を認知後、発話していると考えられる。仮定を表す副詞モシを付加すると、同文脈下では許容性が低下することから見てもそのことは明らかである。ノナラからナラへの「積極的な交錯」を示す事象である。

(40) (自分の分は自分で払うと言われた後で)
そんなに言うなら、君の分は君に払ってもらおう。 (『孤高の人』)

(41) ?もし、そんなに言うなら、君の分は君に払ってもらおう。

(42) (警察の家宅捜査を受けた暴力団組員が警察官に) こんなことをするなら、裁判で争ってやる。 (蓮沼1985：67)

(43) ?もし、こんなことをならなら、裁判で争ってやる。

(44) (柳は挑戦できた) あの柳が挑戦できるなら、内藤にも不可能ではなかったはずだ。 (『一瞬の夏』)

(45) ?もし、あの柳が挑戦できるなら、内藤にも不可能ではなかったはずだ。

(40)・(42)・(44) では、本稿の主張によれば、ノナラが使用されるべき状況である。したがって、当然ノナラに置き換え可能である。

(46) そんなに言うのなら、君の分は君に払ってもらおう。

(47) こんなことをするのなら、裁判で争ってやる。

(48) あの柳が挑戦できるのなら、内藤にも不可能ではなかったはずだ。

それにも関わらず、なぜノナラではなくナラが使用されるのであろうか。

5.3.2. 交錯が生じる理由

(42) を取り上げた蓮沼 (1985：67) は「事態が確定しているものであって

も、それを主張・意図する聞き手の内面世界は話し手には不確実なものであり」ナラが使用できると分析している。鈴木（1993a：7-8）は蓮沼の説を受け入れつつ、「表現を柔らげたり」、「現実の状況に対する不満を表明する」といった「表現効果を得るため」ナラが用いられ、「条件を満たさない状況が想定されている」と述べている。

しかし、これらの分析では条件表現が使用されている理由は説明できるものの、(46) ～ (48) が示すように、命題の性格上、ノナラを用いる方が適切であるにも関わらず、なぜナラが用いられるのかという点を説明することはできない。

それに対し、本稿での仮説によれば、ナラが使用されているということは話し手が「ある命題を可能世界において真であるとする」という想定を行っているにすぎず、現実世界における状況との「関連づけ」は前提されていないことになり、話し手は現実世界とは距離を置き、可能世界を構築していると分析することができる。つまり、現実世界の事態を素材として、ある可能世界を構築し、その世界において帰結を述べることを何らかの事由により意図する場合、ナラが用いられると考えられる。現実世界の事態を素材としていることは (40) の「そんな」、(42) の「こんな」、(44) の「あの」という「例の提示」的用法を持つ連体詞の使用から見ても明らかである。

(42) の例で考えると、次のようになる。発話者は警察が実際に家宅捜査をしているという現実世界の状況を「可能世界で生起しうる一つの事態」として捉え、「警察がこのようなことをする」という命題を形成する。そして、「その命題を真であるとする」という想定を行い、その想定を条件として提示し「裁判で争う」という意志を帰結節で主張する。ところが、この条件は「現実世界の事態」と結果的に一致するため、条件が成立したことになり、帰結の主張が現実世界において成立することになる。その結果、聞き手は、「裁判で争ってやる」を話し手の現実世界における主張であると理解する。また、話し手もそのことを想定・期待して発話していると考えられる。その想定・期待があるからこそ、現実世界に対する主張として (42) を発話すると考えられるのである。

以上をまとめると、次のようになる。話し手は現実世界の事態を素材とする「ある命題」を形成し、「その命題を可能世界において真であるとする」という想定を行う。そして、その想定を条件として提示し帰結を述べる。この条件は現実世界の事態と一致するため、話し手は聞き手が当該帰結を可能世界の事態ではなく現実世界の事態として理解することを想定・期待し、現実世界における発語内行為の成功を意図し、望ましい発語媒介行為の発動を期待している。この発話は話し手の現実事態に対する態度を表明する。果たして、聞き手は話

し手の期待どおりに理解し、伝達は成功する。ただし、話し手の望む発語媒介行為が発動されるとは限らない。

しかし、なぜ、「現実世界の事態」をあえて「可能世界で生起しうる一つの事態」として扱い、このような発話と伝達を行うのであろうか。その理由として考えられるのが「聞き手との関係」である。話し手が聞き手との関係を考慮し、間接的発話の方が適切であると判断した場合、このような発話を行うものと考えられる。鈴木（1993a）の言う「表現効果」とはこの「聞き手との関係」を考慮した具体的な方策の表面化したものであると考えられる。

以上、本来ノナラが使用されるべき場合に、積極的にナラが選択される事象について考察した。ナラが使用されるのは「聞き手との関係」から「ある表現効果」を求めるためである。その「表現効果」（鈴木1993a）を得るためには、「関連づけ」を前提し、「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を条件として提示するノナラではなく、「ある命題を可能世界において真であるとする」という話し手の想定を条件として提示するナラを用いた方が効果的であるため、ナラが選択されるものと考えられる。

5.1節で述べたように、「既定命題」は「ある命題」の下位分類に属するため、「既定命題」を「ある命題」として把握することは可能である。したがって、ノナラで表す事態をナラで表現することが可能となるのである。

6. 問題点への回答

本章では以上の考察を踏まえ、2.2節で提出した先行研究の問題点に対し、本稿の仮説に基づいた立場から回答を試みる。

まず、ナラが前件を「聞き手（あるいは人一般）の断定として、完全に同意しないまま」（久野1973：108）提示することができるのはなぜかという点についてである。4.1節で述べたように、本稿では、ノナラの前件は「聞き手（あるいは人一般）の断定」ではなく話し手の断定であると考える。したがって、問題は「完全に同意しないまま」提示するのはなぜかという点である。

先述のように、ノナラ節は既定命題からなる。この既定命題が、「聞き手（あるいは人一般）の断定」と関連づけられ、先行発話の音形をそのまま受け入れることによって形成された場合、表面上「聞き手（あるいは人一般）の断定」を表しているように見える。しかし、それはあくまで「話し手の判断によって、ある状況と主観的に関連づけられた既定命題」である。この既定命題は

関連づけが妥当であるか否かという点と、現実世界において真であるとは限らないという点で不確定性を有していると考えられる。久野の言う「完全に同意しない」を「仮に真であるとし、その想定を条件として提示すること」であると解釈すると、「完全に同意しないまま」提示するのは既定命題の持つ不確定性を話し手が積極的に認識するためであると考えられる。

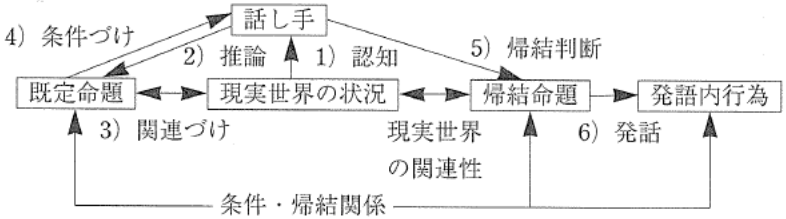
「命題の外にある他者の意向・主張と話し手の発話意図の関係づけ」（蓮沼1985：72）を行うことができるのはなぜかという点については次のように考えることができる。既定命題の関連づけには聞き手の発話した命題だけでなく、状況・文脈等が大きく影響する。つまり、話し手は「命題の外にある他者の意向・主張」も取り込んで既定命題を推論し、関連づけるということである。そして、「既定命題が現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を条件として帰結を発話する。そのため、「命題の外にある他者の意向・主張と話し手の発話意図の関係づけ」が可能となるのである。

なぜナラは異なった時間軸に沿う前件と後件とを「話者の判断」で結び付けることができるのか（有田1991：108）という疑問点も本稿の仮説から説明が可能である。3章で述べたように、ノナラ節で提示される既定命題は「関連づけ」を前提し、「話し手の判断によって、ある状況と主観的に関連づけられたもの」であり、現実世界と強い関連性を持つものの、あくまで一種の概念であり、鈴木（1993b：139）が指摘するように「時間性をはぎ取られ」た性格を持つ。[注12]その既定命題は条件となって帰結と関係づけられることになるが、帰結は現実世界における話し手の判断や意志等であり、やはり、現実世界と強い関連性を持つ。つまり、現実世界の状況を介して条件づけという「話し手の主観的判断」によって既定命題と帰結とが関連づけられていることになる。そのため、異なった時間軸に沿う前件と後件であっても「話者の判断」によって両者を結び付けることが可能になるのである。それを図で表すと（49）のようになる。1）～6）はノナラ条件文の生成過程順序を示す

---

[12] 鈴木（1993b：139）ではノナラ条件文の前件について「現実との直接的な対応を持たないコトとしての性格を持つ」と述べているが、ノナラ条件文の前件は「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題」からなるとする本稿の立場からは首肯しかねる。

(49) ノナラ条件文における生成過程と条件節・帰結節の関連モデル



以上、ノナラが「『ある状況と主観的に関連づけられた既定命題を現実世界においても真であるとする』という話し手の想定を条件として提示する」という本稿の仮説によって先行研究で指摘された諸事象に対して統一的で合理的な説明が可能になることを示した。

7. 結語

本稿ではノナラとノナラに置き換えられるナラを主たる考察対象とし、その両者の類似点・相違点について考察した。要約すれば次のようになる。

(50) 本稿の結論

a. ナラは「ある命題を可能世界において真であるとする」という話し手の想定を帰結に対する条件として提示する。

b. ノナラは「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を帰結に対する条件として提示する。

c. ノナラをナラに置き換えることは通常問題ない。しかし、条件節を構成する命題の性格が「文脈命題」から「話者思考命題」へと変化するため、意味の変化が生じる。

d. ナラをノナラに置き換える場合、条件節を構成する命題の性格が「話者思考命題」から「文脈命題」へと変化するため、「関連づけ」を前提しうる適切な状況や文脈の想定が必要となる。そのような状況や文脈が想定不可能な場合、ノナラの許容性が低下する。

e. ナラとノナラは区別されるべき別形式である。

参考文献.

Alfonso, Anthony (1966) *Japanese Language Patterns*, Sophia University.
有田節子 (1991)「日本語の条件表現と叙述の特定性という概念についての一考察」『日本語・日本文化』17 大阪大学文学部 pp. 97-112.
Inoue, Kazuko (1979) " On Conditional Connectives "『日本語の基本構造に関する理論的実証的研究』文部省科学研究特定研究報告 pp. 97-112.
尾上圭介 (1999a)「文の構造と"主観的"意味－日本語の文の主観性をめぐって・その2」『言語』28-1 大修館書店 pp.95-105.
――― (1999b)「南モデルの史的意義」『言語』28-12 大修館書店 pp. 78-83.
久野暲 (1973)『日本文法研究』 大修館書店.
国広哲弥 (1985)「『のだ』の意義素覚え書」『東京大学言語学論集' 84』東京大学文学部言語学研究室 pp. 5-9.
――― (1992)「『のだ』から『のに』・『ので』へ－『の』の共通性」カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会 pp. 17-34.
小坂光一 (1998)「『成立』と『存在』－『融合』に関する覚書」『ことばの科学』11 名古屋大学言語文化部言語文化研究会 pp. 33-49.
坂原茂 (1985)『日常言語の推論』東京大学出版会.
鈴木義和 (1993a)「ナラ条件文の用法－聞き手との関係を中心に－」『園田語文』7 園田学園国文懇話会 pp. 1-13.
――― (1993b)「ナラ条件文の意味」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版 pp. 131-149.
Schmerling, S.F. (1978) "Synonymy judgements as syntactic evidence" Cole P. ed. *Syntax and semantics, 9 : Pragmatics*, Academic press, pp. 299-314.
田野村忠温 (1990)『現代日本語の文法Ⅰ』和泉書院.
名嶋義直 (未発表)「ノダに関する一考察－「関連づけ」と「関連性」－」
蓮沼昭子 (1985)「「ナラ」と「トスレバ」」『日本語教育』56 日本語教育学会 pp. 65-78.
Hinds, John. & Tawa, Wako. (1975-76) " Condition on Conditional in Japanese " *Papers in Japanese Linguistics 4* くろしお出版 pp. 3-11.
深田淳 (1992)「日本語研究と急進的語用論」カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会 pp. 145-157.
Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances*, Basil Blackwell Ltd. 武内道

子・山崎英一訳（1994）『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房.
三上章（1953）『現代語法序説－シンタクスの試み－』刀江書院 （復刊くろしお出版 1972）
毛利可信（1980）『英語の語用論』大修館書店.
山口尭二（1969）「現代語の仮定条件法－『ば』『と』『たら』『なら』について－」『月刊文法』2-2 大修館書店 pp.148-156.